



展開

■ 村井 純

「この「電話」という技術は真剣なコミュニケーションの手段として利用するには欠点が多すぎる。この技術は我々にとって本質的な価値は何もない」という 1876 年のウエスタンユニオンの資料の言葉は、コミュニケーションテクノロジーの新しい導入はいつの世でも大きな抵抗があるものだと感じさせる。

「この無線オルゴールから商業価値が生まれる可能性はない。相手を特定しないメッセージに金を払う人がいるはずがない」という言葉は、1920 年代にデビッド・サーノフがラジオを産業として進める投資への呼びかけへの返答として記録されている。広告と無料放送というビジネスモデルが知られる前は、無料放送が産業として認められるわけもない。そもそも大規模なリスナーを前提としたマーケティングの理論は、放送技術そのものが存在していないときに理解されることがきわめて困難であったことは想像に難くない。

ビジネスモデルといえば、私がよく引用するのは、NHK の放送 50 年史という文書にある、昭和 3 年の大相撲中継の話である。当時、経営難に陥っていた大日本相撲協会は、ラジオ放送による中継の提案に「もし相撲の中継放送を許したら、国技館の観客はますます減るであろう」と主張して東京中央放送局の申し入れに応じなかった、とある。ところがそのとき、六代目出羽海親方が次のように言ったというのだ。「ラジオでおもしろそうな勝負を耳にすれば、相撲に関心の薄い人もきっと国技館に来るようになる」。この意見で中継が決まったという。

■ 村井 純
慶應義塾大学 環境情報学部長 教授

工学博士。1984年日本の大学間ネットワーク JUNET を設立。1988年インターネットに関する研究プロジェクト WIDE プロジェクトを設立し現在はファウンダーとして指導にあっている。内閣官房 情報セキュリティセンター 情報セキュリティ政策会議 委員、本会フェロー、日本学術会議連携会員。内閣他、各省庁委員会の主査や委員等を多数務め、国際学会等でも活動。



この文書は、「はたして昭和三年一月、春場所大相撲の実況が東京・両国の国技館から中継されると、大鉄傘下のマス席はたちまち超満員となった」と結んでいる。情報通信やメディアの視点から言えば、六代目出羽海親方は昭和3年の大アントレプレナーだと言える。

エジソンの発明品から命名された米国音楽の賞はグラミー賞である。グラミー賞の授賞式はレコード会社やプロダクションの壁を一年に一度だけ取り払って行く、最も贅沢で豪華な音楽ショーでもある。クラシックの朗朗だろうが、ボブ・ディランだろうがレディー・ガガだろうがだれかれ構わず大活躍で、音楽ファンにとっての夢の祭典である。昨年、2010年のグラミー賞授賞式のクロージングで主催者の代表が興味深いスピーチをした。「このように音楽は人の生活を豊かにして幸せにする。聞きたい音楽をいつでも聞けるように、自由(フリー)にダウンロードできいつでもそのような音楽を楽しめるインターネットの環境も進んでいる。今日出ている人たち、この人たちはもういいんだ。無料(フリー)で、楽しんでもらって構わない。ただ、音楽を創る人の中には、毎日家族を養う人、生活に困る人、これからの音楽を担っていく人もいる。この人たちが次の音楽を創り、人を幸せにするまで、どうすればいいかをみんな考えようじゃないか」。

技術の進歩に社会は悩み、進んだり戻ったり。がんばろう情報処理学会！

